

玩具映画および映画復元・調査・研究プロジェクト

研究年度・期間：平成15年度

研究ディレクター：太田 米男
(映像学科 助教授)

共同研究者：中島 貞夫
(藝術研究所長 教授)

学外共同研究者：松本 夏樹
(芸術計画学科 非常勤講師)

安井 喜雄
(プラネット映画資料図書館代表)

山形 文雄
(劇団みんわ座 代表)

豊原 正智
(芸術計画学科 教授)

小山 帥人
(映像学科 非常勤講師)

上倉 庸敬
(大阪大学 教授：同人誌「FB」代表)

野中 和隆
(アニメーション作家)

藤岡 幹嗣
(藝術研究所 嘱託助手兼博物館事務室)

宮島 正弘
(映像学科 非常勤講師)

富田 美香
(立命館大学 助教授：マキノ・プロジェクト代表)

平田 泰規
(ビデオ・ドキュメンタリー作家)

常石 史子
(東京国立近代美術館フィルムセンター研究員)

石原 香絵
(ナイトレート・プロジェクト代表・現国立フィルムセンター勤務)

ジョアン・R・バナディ
(アメリカ・ロチェスター大学 助教授)

森脇 清隆
(京都府京都文化博物館学芸員)

五影 雅和
(株式会社角川大映映画・ビデオグラム・グループ)

須佐 見成
(IMAGICA ウェストフィルム事業部 部長)

玩具映画とは、大正から昭和の初頭を中心に、手回しの玩具映写機によって、一般家庭で映画を見る習慣があった。映写機はブリキ製の玩具だが、その映像ソフトは、劇場で公開された35mm映画フィルムの断片を切り売りされ、また玩具映画専用で作成されたものであった。今回のプロジェクトは、その「玩具映画」を中心に、映画の修復と復元、保存、またそれに関する文献資料収集と調査、資料のデジタル・ベース化、そして聞き書き(映像記録)を研究課題とするものであった。また、映画のルーツとも言える錦影絵の復元や芸能伝承をも研究対象とし、その調査も行うことを目的としてきた。

玩具映画に関しては、オリジナル・フィルムの損傷が烈しく、その修復に思いの外、時間が取られ、実際の復元作業が著しく遅れることになった。この作業は、大阪の(株)IMAGICAウエストという劇映画専門の現像所で行ったが、彼らも経験のない劣悪状態のフィルムを扱う作業であり、そのため、当初計画した研究領域までは進めず、まずは玩具映画フィルムの修復・復元に専念し、時代劇映画を中心に復元することに限定した。

今回の研究経過を報告すると、まず、プラネット映画資料図書館や映画愛好家たちの協力を得て、約250本のフィルム(一部、玩具映画ではない)を提供して頂き、「玩具映画プロジェクト」の作業に入った。まず、これらのフィルムの「仮のリスト表」(内容が判らないため、仮題を付ける)により、現像所において、修復・復元作業に入った。大半が「ナイトレート・フィルム」(可燃性)であること、また加水分解によるフィルム・ベースの破壊、歪みや縮み・パーフォレーション(穴=目)の破損、乳剤の溶解や剥離など、それぞれの素材の状態が異なっているため、個別の修復作業となる。特に、加水分解が始まると、他のフィルムにも感染するため、250本以上のフィルムを個別に修復する作業は、神経を集中させる緻密なものだけに、現像所も営利を超えて協力して頂くことになった。

パーフォレーションの修復などを行い、それぞれの状態にあるものを分類、特にオリジナルは提供者に返却しなければならないために、それぞれの協力者別、復元素材別、ジャンル別、

損傷状態別などに素材を分けて、テレシネ（ビデオ化）作業に入る。幸いなことに、テレシネの掻き落としピンは、割にルーズであるために、大半の作品がビデオ化できている。すでに、加水分解や目潰れのためテレシネすら不可能な作品は除き、染色や調色による色彩作品が多く、素材の状態や損傷状態などを明記し、色分けして分類、リスト化した。これは、複製ネガ（DN）を作成する時、カラーかモノクロ・フィルムを使用するかを決定することになる。

次に、テレシネしたビデオテープによって、ジャンル別リスト作成と作品分析の調査に入る。「時代劇映画」・「現代劇および実写映画」・「国産動画映画」・「海外動画・実写映画」別に分類。「時代劇映画」は、尾上松之助映画が3本もあり、大正期の貴重なものも含まれていた。その他、現在の収集作品を列記すると、時代劇映画では、阪東妻三郎15本、市川右太衛門14本（内1本＝予告編）、大河内傳次郎31本（内11本＝伊藤大輔作品）、林長二郎（長谷川一夫）8本（内1本＝長谷川一夫）、嵐寛寿郎12本、片岡千恵蔵9本、その他47本は題名が判らず、更に調査を必要としているもの、計139本（内25本＝昨年分）。「国産実写映画」（軍神ものなどの劇映画・記録映画・ニュース映画を含む）35本（内6本＝昨年分）。「国産動画映画」は、単なるキャラクターものから戦争国策アニメ、また玩具映画独自に製作されたものもあり、110本（内21本＝昨年分）。「海外実写映画・動画映画」映画21本（内8本＝昨年分）、ポパイやベティ・ブーブなど海外動画映画は30本（内5本＝昨年分）、総作品数335本（内65本＝昨年分、今回の総数270本）。勿論すべてが復元できる訳ではないが、復元可能な作品だけでも貴重なコレクションとなる。今回は、時代劇に限定したが、次回のプロジェクトでは、他のジャンル、特に国産動画の調査を行うことで、研究を継続する。

修復・復元作業は、前述したように、オリジナル素材の劣化のため、例えば、フィルムの縮みによってオプチカル・プリンター（光学焼付機）の掻き落としのピンを研磨するなど、機械の加工も含め、現像所の過分なほどの協力を得て、一部を除き、大半のフィルムの復元が可能になった。これまで、海外でしか作業できなかったものが可能になり、これは大変な成果と言える。

大正・昭和初頭の風俗としての玩具映画の研究もあり、また散逸した映画作品としての研究活用もある。今後の活用方法については、他の研究分野の方たちへの研究素材を提供することになる。

今後の作業として、各復元フィルムにタイトルや博物館所蔵など字幕を撮影し、復元した複製原版に加え、本学博物館に移管する作業に入ることになる。また、すでに海外での反響もあり、アメリカのAMIA（Association for Moving Image Archivists）などから、玩具映画・復元の発表を提案されている。（既に、共同研究者の数人がメンバーであり）、博物館や個人での入会も提案されているが、まずは今年の京都映画祭での作品展示や学外発表も計画している。

錦影絵に関しては、大阪歴史博物館との共同で、種板の調査により、「池田の猪買い」をまず復元することに決定、次回のプロジェクトで映写装置（風呂）と共に、具体的な復元作業に入る。